

教室機関誌の創刊を祝し 新しい飛躍を願う

谷岡武雄（立命館総長・大学長）

学祖の西園寺公望により立命館が創始されて120年目、そして学園創立90周年を祝い前年において、地理学教室関係者の総意に基づき、機関誌の第1号が刊行されることは、まことに慶びに堪えない。関係者一同に対し、心から祝意を申し上げる次第である。

わが地理学教室の歴史は、全立命館学園では中ぐらいの古さをもっている。それは1935年（昭和10）の専門学部文学科歴史地理学科の設置に始まるもので、同年には早くも『立命館35周年記念論文集』文学編が刊行された。そして、翌年には『立命館文学』3巻5号を「近畿地理学」にあて、教室の創設に尽力された鈴木福一、岩根保重両先生らが寄稿されている。

さらに1941年の法文学部文学科への改編昇格にあたっては、独立の地理学科が国史・国文・漢文の3学科とともに並置されることになった。同じ年には学生を中心とする地理学同友会が設立されており、また文学科創設を祝う『記念論文集』には、教室創設者の一人である岩根保重教授が執筆されている。

地理学教室関係者の研究意欲は創設当初からまことに旺盛であった。1941～43年（昭和16～18）に出版された『立命館大学論叢、歴史地理篇』1～4号を見ると、教授側では、藤岡謙二郎先生の河内・大和の考古地理誌に関する、岩根保重先生による京都地方の古地誌についての、織田武雄先生のバビロニアの世界図に関する、松下進先生の山西省の地質についての諸論考がみられ、学生側からは森田敬一君のレンコン栽培に関するレポートが掲載されている。先生方の諸論文をあらためて拝読すると、まことになつかしく、また講義のおりの状況が思い起こされ、後に集大成されるに至った御研究の原点がここにあったような気がしてくる。

その後戦雲は急を告げ、学徒出陣でなければ勤労奉仕という形で教室に学生がほとんど来れなくなり、私自身も海軍に召集されてしまったので、敗戦前後の大学については、ほとんど記憶にない。無謀で世界的視野を欠く指導者に率いられた日本人のすべてが、まことに苦い経験をしなければならなかったことは、周知のとおりである。

戦後、飢えに苦しみながらも文学部全体の研究意欲はいっこうに衰えることなく、早くも1947年（昭和22）7月には、大きくは立命館大学論叢の枠の中で『立命館文学』が復刊されることになり、良質でないセンカ（仙花）紙のようなもので、第61号が出版されている。そうして1949年の第68号は『史学地理学特輯』にあてられることになった。

しかし、当時の地理学教室関係者は、『立命館文学』での発表に満足することはできなかった。教員の指導のもと、学生や時には卒業生が一体となって研究グループをつくり、特定のテーマ・地域に挑戦するという美風は、今も昔も変わりがなく、すでに岩根先生時代の1945年1月に総合的な地誌書といわれる『生駒山脈』が刊行されており、また1948年12月には、藤岡先生の主導と着任後間もない山口平四郎先生らの協力により、『日本の風土』が出版されている。これは教員のみ執筆であるが、かなり後年にも時おり注文を受けるほどユニークな刊行物であった。同様に『立命館文学』だけに頼ってはいという気持が、私たちをして、ガリ版の『地理学研究小報』の刊行へと向かわせた。この小報は1948年12月に発刊され、1951年9月までに4号を出版している。それは教室機関誌の先駆ともいうべきものであろう。

私はいま、なぜ『地理学研究小報』を続刊しなかったのかについて、いささか反省しつつ、その理由についてあれこれと思いをめぐらせている。結局、雑誌『人文地理』と『立命館文学』の強化に力を注ぐこと、もう一つは広く大学外の雑誌に投稿して他流試合を行ない、みずからの腕を磨かねばならないという教室全体の雰囲気によるものと思われる。

戦後間もなく少数で結成された「西日本地理学会」は、1946年12月に『会報』の第1号を、翌年1月に第2号をいずれもガリ版で出したが、長くは続かなかった。ようやく1948年5月に「人文地理学会」が結成され、同年6月1日に機関誌

の『人文地理』が刊行されるに至った。第4号は翌年11月15日発行となっているから、テンポはのろく見えるが、当時を振り返ると、よく困難をのり越えたものだと思う。織田武雄先生を中心とする諸先生方の御尽力のたまものである。

現在は教員・卒業生を主とするやや懇親会的な地理学同校友会とは別に、教室関係者によって正式の学会を作ろうという声は、時おり起こったかのように思う。私もその必要性を感じていたが、機関誌の発行にまでは思いが至らなかった。関係者が『人文地理』はもちろん『地理学評論』その他に続々とみずからの研究を発表するようになったので、独自の機関誌をもつ必要を痛切に感じなかったからであろう。

今回、教室が機関誌を発刊することを承って、みずからの今迄の怠慢を反省するとともに、若手のエネルギーをひしひしと感じ、次世代、次々世代の将来に強い期待をいただくようになった。約言すれば、若手にはかなわない。若者よ、よくぞやってくれた、である。その意気込みは20歳で立命館をつくった西園寺のそれに比べられよう。

そこですぐ思い付くのは、いつまでも刊行を続けてほしいということである。3号雑誌、つまり1号、2号と勢よく出すけれども3号でとまってしまうような雑誌となつてはいけない。創刊号に名を連ねる執筆者の顔ぶれをみると、私の不安を杞憂に終らせてくれそうである。今や地球規模での環境問題が世間の大きな話題となっている。人間—環境論に長年取り組んできた地理学者の活躍すべき時は、正に來たれりである。本書の発刊をきっかけとして、教室関係者の研究が新たに飛躍的な展開がなされることを期待してやまない。